

YADからSADへ～地元再発見！新しい挑戦に向けて～

栃木県立矢板東高等学校 リベラルアーツ同好会

(1) はじめに

2019年6月1日、2020年に行われる東京オリンピックに関連した全国を巡る聖火リレーの栃木県ルート概要が示された。

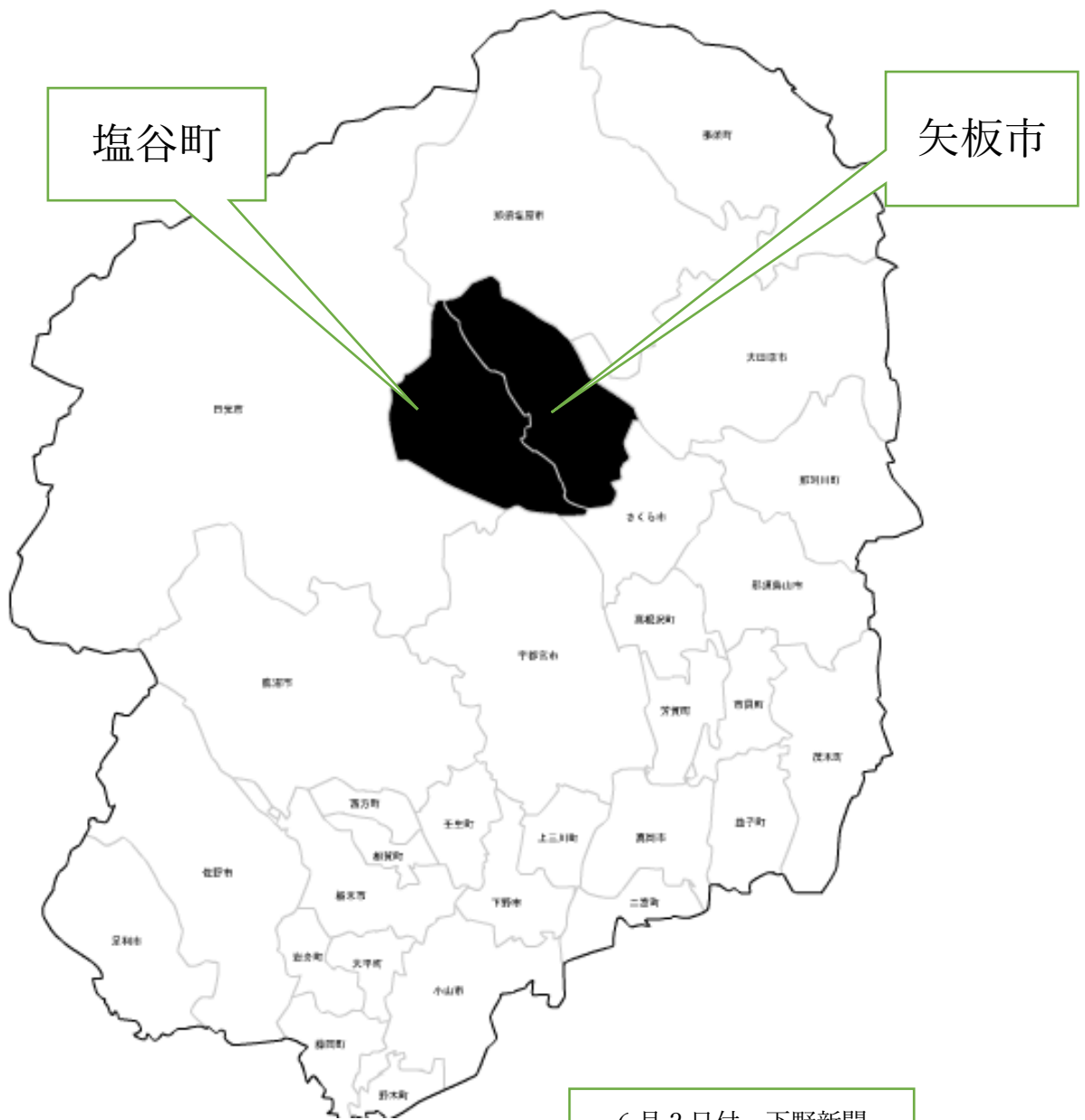
私たちが住む栃木県には市町村が25あり、そのうち16市町を通過するルートが示されたが、私たちが通学している矢板市や隣接する塩谷町、大田原市はルートから外れた。地方紙『下野新聞』の記事によれば、ルートの確定については、日光の二社一寺に代表される世界遺産や那須烏山市や鹿沼市の誇るユネスコ無形文化遺産などの魅力を海外にアピールすることを重視したことや、見学のしやすさや安全性を含めて総合評価した結果とのことだが、裏を返せば、私たちの市町には内外に発信できるだけの魅力が薄いということである。

栃木県は毎年行われている都道府県魅力度ランキングにおいて、毎年最下位争いをしており、2018年はかろうじてワースト3位を免れ、43位であった。そのような県の中でも際立って何もないと位置づけられているのはなぜだろうか。

昨年度、JRと地域が協働で取り組む国内最大規模の大型観光キャンペーンであるデステイネーションキャンペーンが、2018年4月1日から6月30日まで行われた。その結果として、観光をきっかけとした地域間の連携強化や地域活性化の機運の高まり、276のデステイネーションキャンペーン特別企画の創出があったそうである。また観光客入込数は目標を達成し、宿泊数は目標に達しなかったものの、初の2年連続200万人を超えたとされている。なかには、ダムカードやマンホールカードに代表されるインフラカードの配布や、地域の歴史遺産や自然遺産、地元特産品を生かしたルートマップの作成など各地域が趣向を凝らした内容でもてなした。それらに矢板市や塩谷町も持ち前の自然豊かな環境を生かし参加した。しかし、デステイネーションキャンペーンの取組は一過性のものであり、宿泊数を伸ばすことができていないという課題を浮き彫りにした。首都圏から近いということが結果的に宿泊数の増加にはマイナスの要素となっている現状はいなめない。

一方で、大田原市では松尾芭蕉ゆかりの地である雲岩寺を取り上げ、女優の吉永小百合さんがCMで出演したことも話題となり、大いに賑わったようである。またNHK大河ドラマ「いだてん」にもゆかりのある土地ということで、観光客も比較的多い。

そのため、今回は矢板市と塩谷町を取り上げ、それぞれの現状と課題を把握し、内発的発展力を提案したい。



6月2日付 下野新聞



(2) 矢板市の現状・課題

栃木県でも県北に位置する矢板市は、県庁所在地である宇都宮から電車で30分ほど北に向かった場所に位置している。交通の利便性が高く、高速道路の矢板インターの活用や国道4号線が通っていることによって、市の産業が発達した経緯がある。特に市の発展に寄与したのはシャープ矢板工場であった。シャープ矢板工場は、「世界の矢板モデル」として液晶テレビの生産に力をいれるはずだったが、最終的にはその座は三重県亀山市に決まり、「世界の矢板モデル」は幻となった。それでも亀山市同様、企業誘致で市が発展を遂げ、雇用の増加や人口の増加につながった過去がある。しかし、シャープの苦境が市を襲い、雇用の減少や人口の減少が浮き彫りとなった現在は、大企業誘致で発展してきただけにそれが失われたことによって市から一気に活気がなくなった。また、高速道路や国道4号線の利便性の高さは、同時に那須方面や宇都宮面へのヒト・モノ・カネの移動を促した。特に宇都宮郊外につくられたショッピングモールや、那須へのアウトレットモールの進出は、多くの若者の魅力を引きつけた。そのような流れのために、観光客は矢板市・塩谷町・大田原市を通り過ぎてしまうのである。さらに矢板はJRが通っているが、塩谷町や大田原市には駅が存在しない。仮に遠方からの観光客がいたとしても、宇都宮、那須塩原市は新幹線が停車するが、矢板には停車しない。このような状況で、さらに町が発展していくにはどうすればよいのか。この状況を打破する解決策を以下に提案する。



SHARP創業者の早川氏の名字が、矢板市では町名となっている。

かつての面影はなく、広大な敷地は少し荒れてしまっている。企業誘致で栄えた矢板市は次の市の在り方を模索している状態が続いている。

(3) 解決策・矢板のもつ内発的な力①～鉱泉を利用した観光業～

作成者 星野桃子

企業誘致型で発展してきた矢板市だが、シャープの撤退を受けて新しい道を模索しなければいけない。そこで、鉱泉を拠点にしたエコツーリズムやグリーンツーリズムで県内外からの観光客を集めたい。



道が険しく、
対向車とす
れ違うこと
は出来ない。



4WDの自動車以外は
通行できない。



たどり着いた秘境の地



1866年創業の由来が
示されている。

上記写真で示したのは、矢板市の北部に位置する赤滝鉱泉である。矢板市北部には鉱泉が現在3カ所存在するが、その中で、最も山深いところに存在するのが赤滝鉱泉である。4WD以外の自動車は途中で駐車をして歩いて行かなければいけないことや、昔ながらの湯治場であるため、自然を堪能できることは田舎のもつ内発的な力になり得る。また薪でわかしている鉱泉のため、都会では味わえない雰囲気が楽しめるのは最大のメリットである。そのため、「ないものはない」をよい方向にとらえ、この自然環境を生かしたグリーンツーリズムやエコツーリズムを企画したい。釣りや昆虫採集をはじめ、昔ながらの生活が味わえるものが提供できるし、スマートフォンから離れた一日を送ることが出来ることは、かけがえのない体験だと思っている。「ないものはない」を十分堪能できるだけの自然がここにはある。

しかし、道の駅矢板からは少し距離が有り、電車で来る場合もバスは期待できないため、主たる交通手段を考えたい。道の駅矢板から北西に向かって日光に流れるルートよりも、北に向かって進むルートを推奨していく必要があり、そのルートを整備することで外部からの客を那須や日光に逃がさないようにしていくべきである。そのため、鉱泉の近くに立地する山の駅たかはらともタイアップし、自然を活用した観光業を行う必要があると感じる。

この鉱泉を活用した提案に、追い風となるデータが6月5日付けの下野新聞に記載されていた。

第3種郵便物認可

日帰り客78%
「憂鬱少なく」

日帰りや1泊2日の温泉旅行でも心身の健康増進に効果あり。環境省が多忙な現代のライフスタイルに合わせた温泉の楽しみ方を「新・湯治」として提唱している。東京都

内々4日に開いた会合で、日帰り客の78・6%が「憂鬱な気分が少なくなった」と答えたとのアンケート結果も公表した。

このほか「肌の調子が良くなった」との効果は日帰り客

温泉 短期滞在にも効果
環境省、「新・湯治」提唱

の79・3%、1泊2日では80・3%が感じていた。温泉地を頻りに訪れる人ほど滞在後に「より健康になった」と感じる割合が多くなり、年1回の人74・6%だったのに対し、年6回以上だと83・6%になった。

分析した温泉医科学研究所の早坂信哉所長は「湯治は短期間でも健康に良い。長期休暇が取れなくても、気軽に何度も温泉地を訪れるのは効果的だ」と指摘している。

調査は昨年7月〜今年2月に全国20カ所の温泉地などで実施し、20歳以上の計3844人から回答を得た。

記事によれば、温泉医科学研究所の早坂信哉氏によれば、「気軽に何度も温泉地を訪れるのは効果的だ」と述べており、首都圏から近い栃木県の温泉を目的とした観光が増加する流れはできそうだ。そのため、健康志向が強まっている現代において、この環境省の掲げる「新・湯治」提唱は栃木県の課題である宿泊客増加につながるものであると考える。その中で、多様な自然体験を織り込んだ、グリーンツーリズムやエコツーリズムをいち早く、立ち上げていくべきである。

(4) 解決策・矢板のもつ内発的な力②～YADの活動を拠点に～

作成者 YAD 代表 椎貝菜月 副代表 石山琴音 メンバー 相馬優吾

私たちは平成30年に YAITA ALL DIRECTIONS(以下、YAD と略す)という団体が設立を立ち上げた。きっかけは、矢板市が主催の「矢板武塾」という町づくりを行う集まりに参加したことである。この YAD の設立目的は以下の通りである。

目的：高校生が主体的に地域と関わり合いながら、矢板市の活性化を目指すとともに、その活動を通して「自分の居場所」を創りだすことを目的としている。ここでいう「居場所」とは、物質的な空間だけでなく、「心が安まる」「存在意義を感じられる」といった意味を含む。また活動そのものが、私たちにとっての居場所となることを目指す。

活動内容

① 花火大会に出店

目的：YAD の P R、メンバーの募集を含め、祭りに積極的に参加をして盛り上げる。

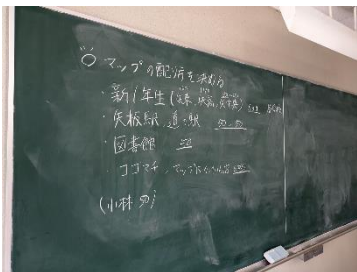


活動の P R と販売

② 高校生向けのまち歩きマップ作り

目的：マップ作りを通して、矢板についてもっとよく知り、地域の方と交流をする。

高校生に地元に対してもっと知ってもらうための、手段として作成する。



マップをつくるための会議を実施



試行錯誤の末、完成したマップ

③ 地域おこし協力隊と協力した空き家の改修工事

目的：空き家の増加に歯止めをかけると共に、リニューアルして価値を見いだす。



きれいに塗り直して、リニューアル。
おしゃれな空間に様変わり。



YAD の基本方針

YAD では、自分たちで企画した事業を実施する。

企画力、計画力、行動力、思考力を養うよい機会と捉え、より主体的に活動することで、地域と向き合うことができるようにする。

YAD のこれから

様々な活動を通して、地域とのつながりを深め、より高校生が参画していくことで、町づくりに力をいれていく。直近では「高校生カフェ」をつくることを目指している。

学校の枠を越えて結成した団体であるため、多様な意見がでてくることが醍醐味である。そしてこの活動が市町村の枠を越えた交流になっても面白いと考えている。

ラジオ、新聞を始め、様々なメディアを活用し、矢板市の魅力を発信することに成功している。



【活動の様子】

①7月 設立総会



②8～10月

10月13日（土）の花火大会に合わせ、団体PRを目的としたメンバーによる出店に向けた準備を進めた。当日は、タピオカドリンク、コーンスープの販売およびチラシ配布による団体PRを行った。



③11～3月

まちあるきマップ第1弾は「駅近グルメ」とのテーマを設定し、メンバーが選んだ市内店舗への取材やマップの作成を行った。



④2月・3月

地域おこし協力隊が運営する組織「矢板ふるさと支援センターTAKIBI」のワークショップに参加。また、「TAKIBI」の拠点を整備中である矢板駅西側にある建物内に「高校生カフェ」の整備を開始。

次年度の活動予定なども検討し始めた。



⑤その他

SNSを活用した団体活動の発信に加え、新聞記事、YOUTUBE、ラジオなどを通じ、団体PRを行った。



(5) 塩谷町の現状・課題

作成者 安達奏音

栃木県の北部、矢板 I C から約 5 km という場所に塩谷町は位置している。塩谷は尚仁沢湧水をはじめとする豊かな自然や広大な田園の広がる緑あふれる町だが、今その町から人が消えつつある。(平成 21 年度 6 月から 2000 人の人口減少) 現在の町の人口は約 12000 人であり、栃木県でも最低水準である。しかし一方で、高齢人口は増え続けており、高齢人口は平成 29 年の統計では 35.3% となっている。

この人口減少の原因の 1 つと考えられるのが、町内の交通の利便性の低さだ。現在塩谷町に駅はなく、唯一の交通機関であるバスの運行も芳しくない。実際に町営バスは平成 14 年に廃止されており、現在は矢板市と塩谷町を結ぶしおや交通のバスが、1 日往復 5 便となっている。また関東バスが塩谷町と宇都宮市を結んでおり、1 日 18 便となっているため、通学という観点でも高校生が県の中心部に流れやすい状況にある。

町民のほとんどが自動車を所有し、自動車がなくては生活が出来ないといった状態になっている。更に、この交通の利便性の低さは町内への影響だけでなく、町外から来る人にも観光を目的として訪れることに影響を及ぼしている。このような要因から、塩谷町が内外の人口の獲得を妨げていることは間違いないだろう。

また、町内には高校がなく、事業所も他に比べると少ないため、人が外から入ってこないという問題もある。平成 26 年度の総務省経済センサスによれば、宇都宮市が 22875 事業所に対して、塩谷町は 495 事業所しかない。

さらにもっともこの町を襲っている問題として、放射性物質の最終処分場の候補地となっていることである。町をあげて反対運動する理由は、自然環境の豊かさをウリにしているためである。豊かな自然が汚染された場合、この町の存続にかかわり、その問題は隣接する矢板市や日光市も及ぶものと考えられる。



様々な問題を抱えている塩谷町には、人がとどまらない。この状況で塩谷町に人をとどめるにはどのような策を講じる必要があるか。

(7) 道の駅の果たしている役割

矢板市、塩谷町にはそれぞれ道の駅が1か所ある。この道の駅を生かした町作りを考えたいが、課題が多い。それぞれの道の駅の特徴は次の報告書とおりである。

「道の駅矢板」 調査報告 相馬優吾、増子晃希

5/19 実施日

1 施設

直売所：矢板産の肉、野菜、果物、工芸品や酒、米、花、調味料などが売っている。

りんごを使った商品は棚1列以上置かれていた。

りんごを加工した商品を中心としたいわゆる矢板ブランドのものが多く。

地産地消を目的に設置され、今ではJAしおのやのものを置いている。

食堂：そば、うどん、カレーなど普通の食堂である。矢板のりんごを使ったソフトクリームも売っている。

駐車場：ややせまいが、よく整備されていた。

エコハウス：道の駅より1年前に完成。環境省より補助をもらって作られた。

栃木県産の木材、石材、廃ガラス、和紙を使っている。

エコハウスは全国で20カ所あるが、道の駅と接しているのは矢板のみである。

2 周辺の状況：西側は田んぼや畑。東側は市役所、図書館、文化会館などがある。

駐車場に接している道路は北へ行くと矢板インターがある。南側は那須まで通っている。車の通りは多い。

3 気付いたこと：昼頃に訪れたが、駐車場はほぼ埋まっていた。直売所も人が多かった。

自転車やバイクは少なかった。

残念ながら、中高生の姿は見られなかった。



エコモデルハウスの説明

「道の駅湧水の郷しおや」調査報告 安達奏音

5/19 実施

塩谷町船生に存在する「道の駅湧水の郷しおや」は平成 24 年に作られた県内 20 番目の道の駅である。塩谷町の活性化や地域交流の場として利用されている。

1 施設

道の駅は大きく分けると交流館・直売所・食堂・その他の軽食店に分けられる。

- ・交流館：道の駅の管理事務局をはじめ、町の資料やイベント情報などが飾られているスペース。多目的ホールも併設してあり、ちょっと小さめの体育館くらいの大きさはある。置いてあるものとしては、尚仁沢のPRや船村徹の資料、町の手芸会の作品などである。ここでは、謎のスタンプも押せる。
- ・直売所：他の道の駅などに比べると小さめの直売所で、野菜が中心となっている。工芸品などが一部売られていたりするが、大々的に置かれてあるのは日光や鬼怒川のものが目立つ。
- ・食堂：直売所からそのまま入れる食堂である。そばやカレーなどオーソドックスな道の駅といったラインナップである。
- ・軽食屋：食堂とは別に存在するいくつかの店がある。ラーメン屋やスイーツ、あゆの塩焼きなんか売っていた。(あゆラーメンもあった) 割とかき氷を食べている人も多かった。

他にも露店のような形で手作りのものを販売している方がいた。革製品やデニムを加工したバック、婦人服などフリーマーケットに近い感じだった。

建物の後ろには広々とした野原が広がっていて、サッカーゴールなどがあるところから見るに、地元のひとにとってのフリースペースといった感じなのかもしれない。

2 周辺の様子

自動車の通りは少なめ。周りは田んぼだらけで向かいにはJA、向うには山がそびえる。近くに町営の住宅地があるものの、スーパーマーケットやコンビニエンスストアが数軒あるのみである。

3 見受けられた特徴

観光客に勧めているという点は尚仁沢と演歌界の有名人、船村徹の2つである。

- ・施設内の交流館では、尚仁沢関連の展示や尚仁沢湧水の自動販売機がある。
- ・自然豊かな印象を抱かせる道の駅の名前は個性がある。
- ・船村徹に関しても、展示や建てられている石碑などから楽しめる要素がある。(ちなみにこの石碑は近づくと曲が流れる)

他の特産物というのは目立って見受けられず、むしろ方向性がばらばらな印象をもった。感想としては、思っていたよりも人がいるという感じであったが、大体が地元の人と見受けられ、対外的な効果というのはとても薄いように思った。



尚仁沢湧水
の商品化



船村徹
を讃える
石碑



日光市の特産品を販売していることが
気になる。塩谷町の個性がない。



道の駅のまとめ

矢板の道の駅から塩谷町の道の駅まで約 14 km であり、それぞれ地元の特産品を生かした商品を提供しているが、市内、町内からの客が主になっており、外部からの観光客の誘致にやや課題が見られる。

また塩谷町の道の駅から約 12 km 離れたところに、日光の道の駅があり、そこには、塩谷町がウリにしていた、船村徹の記念館が建てられた。記念館と石碑では、さすがに観光客は日光を選ぶ可能性が高いように思われる。

道の駅の規模も日光市の方が大きい上に、
観光地としてのネームバリューもある



(8) まとめ~YAD から SAD への派生、連携への期待

これから地方が創生を図るには、このような「地方にしかない魅力」を生かすことが必要になってくる。都市には無い自然の魅力、広大な土地を生かした田舎ならではの体験を提供するという形で地方と都市との結びつきを強くすることが重要であり、それが地方の発展の糸口となるだろう。さらに、ここでは他の地方との差別化も課題となる。矢板市や塩谷町が周辺の観光地と一線を画すためには、今回提案したような、道の駅を起点とした町おこし、YAD のような団体の協力を仰ぐことが必要だ。そして YAD だけでなく、SAD (Shioya All Directions) のような機関を塩谷町にも設置し、若者の意見を潤沢に取り入れていく体制を整えていくということも、課題解決においてよい効果をもたらすだろう。

矢板の YAD の塩谷町バージョンは SAD となるが、「SAD でも sad(悲しい)じゃない塩谷町」として、私たち高校生が主体的に地元の課題に取り組んでいく必要がある。YAD との地域を超えた交流を起こせば、もっと地元が活気づくのではないか。

地方の人口減少や経済発展の停滞が問題となっている今、地方創生のために新しい地方の魅力の発掘、そして「なにもない」ことを生かす取り組み方法の模索が求められている。

そしてなにより、私たち若い世代も自分の住む市町村に興味をもち、世代を超えて、直面している課題に主体的に取り組んでいくことが望ましいと感じている。

作成者

(2)、(3)、(4)、(5)、(6)、(7) は記載した通り、現地調査や活動を含めた担当生徒によるものである。

(1)、(8) については、現地調査や活動を含めた担当生徒を含め、栃木県立矢板東高等学校リベアルアーツ同好会メンバーを加えた合計 10 名で議論して、だしたものである。

栃木県立矢板東高等学校	普通科	2年	安達	奏音 (あだち かのん)	0287-45-2551
栃木県立矢板東高等学校	普通科	3年	石山	琴音 (いしやま ことね)	0287-98-2798
栃木県立矢板東高等学校	普通科	3年	椎貝	菜月 (しいがい なつき)	0287-62-7067
栃木県立矢板東高等学校	普通科	2年	石崎	莉菜 (いしざき りな)	028-682-7220
栃木県立矢板東高等学校	普通科	2年	坂巻	朝香 (さかまき ともか)	0287-47-1617
栃木県立矢板東高等学校	普通科	2年	菊地	康平 (きくち こうへい)	0287-68-0204
栃木県立矢板東高等学校	普通科	2年	佐藤	乙葉 (さとう おとは)	0287-62-8295
栃木県立矢板東高等学校	普通科	2年	相馬	優吾 (そうま ゆうご)	0287-43-4448
栃木県立矢板東高等学校	普通科	2年	星野	桃子 (ほしの とうこ)	0287-43-0940
栃木県立矢板東高等学校	普通科	2年	増子	晃希 (ましこ こうき)	0287-65-0675